

こころ



THCU Chronicle *Heart* No.19 Spring 2015

第19号



田村哲夫理事長叙勲ご受章祝賀会 (26. 7. 31)
※田村理事長は、平成26年春の叙勲に於いて、旭日中綬章を受章致しました



シャミナーデ大学看護学部長パトリシア・キラディス先生と
東が丘・立川看護学部学生 (26. 11. 13)



ハワイ大学看護・歯科衛生学部准教授
モーリーン・シャノン先生と学生の交流 (26. 11. 7)



キラディス先生と医療保健学部看護学科学生 (26. 11. 12)

開学10周年 本学の教育にかかる将来の夢
2020年東京オリンピック・
パラリンピック競技大会連携協定を締結

CONTENTS 目次

2 「教育にかかる課題と将来展望」について
これまでの10年、これからの10年
平成26年度 東京医療保健大学を語る会

4 平成26年度夏期FD検討会報告
第10回医愛祭報告

医療保健学部 看護学科

5 平成26年度卒業研究発表会

医療保健学部 医療栄養学科

6 教育・研究活動紹介

医療保健学部 医療情報学科

7 院生の声

大学院 医療保健学研究科

8 国家試験対策への取り組み
平成26年度「看護学実習施設に対する説明会」
を開催して

東が丘・立川看護学部 看護学科

9 看護師の業務・役割拡大が実現
大学院修了生より

大学院 看護学研究科

10 学生支援センターより

11 国際交流

12 Topics

「教育にかかる課題と将来展望」について

これまでの10年、これからの10年 平成26年度 東京医療保健大学を語る会

「東京医療保健大学を語る会」は、初の卒業生を送り出した平成20年度にFD委員会主催により、全教職員が一堂に会して「本学の教育に係る将来の夢を語る会」を趣旨として実施し、以降毎年度1回、授業内容・方法の改善を図るための組織的な取り組みとして実施しています。開学10年目の節目となる今年度の語る会においては、原点に立ち返り、今後の10年に向けて「本学の教育に係る将来の夢を語る会」とし、各学科・各研究科における「教育に係る課題と将来展望について」をテーマとして平成26年10月22日に開催しました。当日は、各学部学科及び大学院でこれまで培った特色あるプログラムを生かした未来への教育について5人の代表教員にお話をいただきました。

看護学研究科と東が丘・立川看護学部の育成する人材について

副学長 大学院看護学研究科長 草間 朋子 教授

平成26年6月には、保健師助産師看護師法が改正され「特定行為に係る看護師の研修制度」が法制化されました。今後は、厚生労働省医道審議会保健師助産師看護師分科会の下に設置された部会において特定行為の内容、研修内容などについての検討が行われることとなります。東が丘・立川看護学部で育成する看護師は、「チーム医療のキーパーソン」として、大学院看護学研究科で育成する診療看護師（JNP）は「地域包括ケアのゲートキーパー」として高度な診療能力を培い健康増進からリハビリテーションまで対象者を総合的かつ継続的にフォローできる能力を養います。また、助産師は、性と生殖のキーパーソンとしてすべての妊婦が安全で安心な出産が自分たちの希望する場所でできるよう日本における周産期医療の質の向上に貢献できる能力を養成します。学部教育では看護の基本を、大学院教育ではANP（高度な実践ができる看護職）の養成を行うとともに、平成26年4月に開設した看護学研究科看護科学コース修士課程及び博士課程では、看護教育・研究を担う人材の育成を目指して、看護師のキャリアのステップアップにも対応しつつ看護の進展に貢献できる人材を育成致します。看護師教育の基礎である東が丘・立川看護学部では看護実践能力の修得を重視して平成24年4月から看護師教育に特化した教育を行い、平成26年4月からは災害に対しても専門性を発揮できる看護師を育成するため「災害看護学コース」を設置し、臨床看護学コースとの2コース制にしました。

tomorrow's Nurse を育てるための取組みとして、社会のニーズに応えるためにカリキュラムの検討や実習の在り方を常に検討し改善しております。

医療は、病院完結型から地域完結型への転換が求められており、その中でも在宅看護が重視されています。在宅看護についての教育への積極的な取り組みも今後の課題として捉えています。多様な患者さん達の多様なニーズに応えられるような看護師を育てていくために看護大学の中では珍しい基盤看護学教育なども取り入れた時代のニーズに合わせた教育を行い、大学と現場との乖離の解消にも取り組んでいきたいと考えています。同時に潜在看護職をいかに活用するかが課題であり、改善にむけてのデータを作っていくことが重要になっています。このデータ等を作る研究は大学が担うべきであり、大学院修士課程の学生や学部学生が行っています。

2025年に向けて看護職の増員が必要とされている中で本学が看護職の養成の拡大にむけて何に挑戦できるかを考えた時、今後は社会人入学制度の導入にも取り組んでいくべきだと思います。

これからの10年の課題は、チーム医療における看護師・保健師の役割拡大と助産システムを担える助産師の養成です。また、学生の出口管理として国家試験100%合格を目指します。大学では学生の出口管理、キャリア開発に焦点をあてた努力をしていくことも大切であり、医療政策分野にも人材を輩出していきたいと思っています。看護を選んでよかったと思ってもらえるような教育をし、看護が魅力的な職業であるということを社会に発信し、「選ばれる学部／研究科」を目指して邁進してまいります。

It's time to globalise!

大学院医療保健学研究科 奥切 恵 教授

今回は、「グローバル化」をテーマにして、英語で発表させていただきました。「グローバル時代」とは言いながら、日本国内では他国に比べてなかなかグローバル化が進みません。しかし、2020年には東京オリンピックも予定されて、もはや時限爆弾のようにグローバル化しなければ、日本は世界で生き残っていけない状況となっています。

「グローバル化」と言えば「英語」が取り沙汰されますが、なぜでしょう。世界で最も多く母語として話されているのは、英語ではなく、中国語です。しかし、世界中ではリンガフランカ（非母語話者同士が母語以外でコミュニケーションをとること）で英語が最も多く使用されているからです。例えば、学術や商業をはじめ、インターネットでは主に英語が使用されています。医療関連の事柄では勿論accuracy（正確さ）が大切ですが、英語ネイティブでさえ、常に教科書に出てくるような文法に正確な英語を話している訳ではありません。英語を使うことを怖がる前に、リンガフランカで自分の意見を主張してみたいか？それに慣れることで、良い自己主張ができるようになります。何も話さず何を考えているかわからない日本の常識は非常識、とも言われています。

さらに世界の人々とコミュニケーションをとる時に必要なのが、「教養」です。アカデミックな世界でも、自分の専門の話ばかりするよりも、日本や世界の芸術や文学などの教養がないと、相手も興味を持ってくれません。グローバルな視点を持ち、まず教員や職員がグローバル化して、学生たちをも巻き込もうではありませんか。

医療保健学部看護学科のこれまでとこれから

医療保健学部看護学科 宮本 千津子 教授

今年度の『大学を語る会』で教育の課題と将来について話す機会をいただき看護学科の10年を振り返りました。平成17年の開学時には看護学科も世田谷キャンパスで1年生を迎えました。2年目になりほとんどの研究室と講義室は五反田キャンパスへ移転しましたが、その後の2年間、NTT東日本関東病院の附属看護学校と同居をさせていただいたのはよい思い出です。教員が揃うに伴い、大学理念に基づいた学科理念の作成や学科内委員会の整備を行い、設置の趣旨に則った教育と研究ができる環境を整えていきました。また、病院等で導入され始めていた目標管理を取り入れましたが、これが共通のビジョンに向かいチームとして取り組む文化づくりとなりました。

続く10年間で672名を看護師・保健師として送り出しましたが、その間、看護師等養成所指定規則の改正、保健師教育の選択制度導入、養護教諭養成課程の新設等に対応して、計4回のカリキュラム改訂を行いました。平成27年度からは、社会の期待に先行する新たな価値を生み出すべく第5次カリキュラムの運用を開始する予定です。

今後においては、超高齢社会で必要とされる看護人材の輩出と成果につながる活動を行っていくため、理念と方針の評価及び発展的改訂に取り組む予定をしています。そのうえで入学から就職までの学生支援、全学科や卒業生、就職先施設、さらに他大学・機関を含め学内外とのネットワークを整備・活用し学際的広域的な研究活動を推進していきたいと考えています。

医療栄養学科のカリキュラム改訂について

医療保健学部医療栄養学科 学科長 小西 敏郎 教授

開学以来10年が経過し、大学および学科のさらなる大飛躍には、これまでの歩みを踏まえて、大胆な長期計画の策定が必要である。私自身は昨年より医療栄養学科の学科長として勤務したばかりで、しかもこれまでは外科医であり、教育職を専門として携わってこなかった。しかし、チーム医療を理解して栄養に関してのリーダーシップを発揮できる管理栄養士を育成することは、外科医の育成と通じるものがあると感じている。

これまで10年間、当科はカリキュラムの大きな変更を行ってこなかった。これから学科の教育・研究について、大学院も含めて、着実に大きく改変してゆかねばならない。それには当学科のデュプロマポリシー、カリキュラムポリシーをよく斟酌してゆかねばならないが、中期計画に掲げられている3項目(図1)はとくに重要である。なかでも「新しい時代のニーズにあった医療を意識する管理栄養士を育成する」ことに重点をおいて、カリキュラムの改訂をはかりたい。

これからの我が国の医療は、高齢社会と少子社会における政策転換が求められており(図2)、(1)高騰する医療費抑制には、在院期間の短縮や受診回数の減少で高齢者の医療費を減らすことであり、在宅や地域での医療が中心となる。また、(2)健康寿命こそ延ばす必要があり、外科などの三次治療や重症患者の治療は限界にきている。食事・栄養については、これからは疾病の一次予防、二次予防が重要で、高齢者に多い「がん、生活習慣病、認知症」を抑える予防する食事・栄養が重要となっている。当学科・大学院で、このような観点をカリキュラム改訂に反映させねばならない。

当学科では本年よりOSCE制度を導入し、臨地実習の充実を図っているが、早急によりカリキュラム改訂ワーキンググループを発足し、来春までに改定案をまとめる予定である。従来のカリキュラムマップを整理しながら、上記の理念に合致するように、廃止科目・新規科目・統合科目・連携科目・移動科目などを勘案してゆきたい。また、文科省から求められているキャップ制も考慮し、4年生の授業の充実が肝要と思っている。4年度には臨地実習・卒業研究、国試対策、就職活動などがあり、科目を増加するには限度があるが、臨地実習、卒業研究や総合演習Ⅱの充実をはかり、一次・二次予防に重点を置いた医療栄養学を最終年度にじっくりと教育できるようにしたい。そして医療栄養の臨地現場で、協働のチーム医療に取り組みながら、そのなかで栄養面に関してはリーダーシップを十分に発揮できる管理栄養士の育成を図ってゆきたい。

「語る会」では、最後に、学生教育のさらなる向上のために大学院の充実も必須であり、教育・研究のスタッフの再編成、ラボやゼミナール室の設置が重要なことを述べた。

(講演では述べなかったが、グローバルな視点から管理栄養士を育てることも教育・研究のなかに取り入れたい。また語る会のあとで全スタッフによりカリキュラム改訂について個々にヒアリングを行った。ほぼ全員が「密接に関連する科目の教師間でカリキュラム内容について定期的に話し合える機会を設けること」を強く希望した。カリキュラムを改訂しながら、このような会合を行ってゆきたい。)

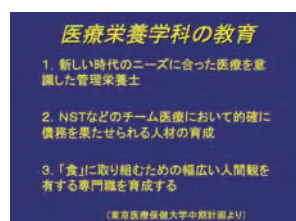


図1

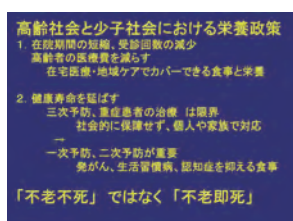


図2

医療情報学科の新しいカリキュラム検討

～アクティブラーニングをめざして～

医療保健学部医療情報学科 津村 宏 教授

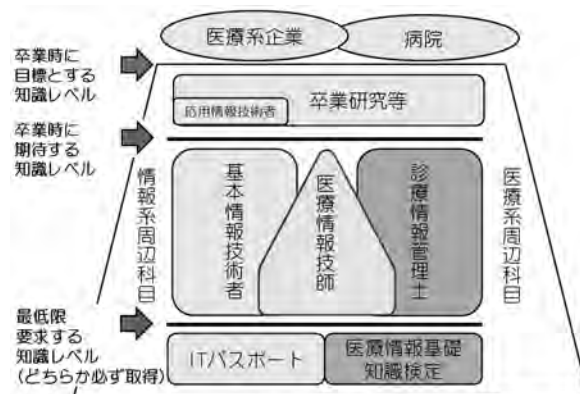
大学開学10年間が経過し、小規模なカリキュラム改訂の繰り返しで、科目間の連続性や連携が不十分となるなどの問題が発生しています。一方で行政からは、アクティブラーニングの必要性や、単位の実質化の重要性が指摘され始めています。教員からも学生の修学姿勢や資質の変化が感じ取れるとの指摘があり、大幅な教育内容や教育方法を改訂する必要性が出てきました。

これらに対応するために医療情報学科の全専任教員が参加し、どのような学生を育成するのか、そのために必要な教育は何かについて議論し、新しいカリキュラムを検討中です。

資格取得は大学教育の目的ではありませんが、目標設定と修学の達成度を視覚化するためには有用です。このため資格試験を念頭に置いたカリキュラムに、教育すべき学問体系を参考にして補完するカリキュラム構成を基本としています。

医療情報学科で最低限取得すべき知識レベルを、情報処理系の基礎資格であるITパスポートと医療系の基礎資格である医療情報基礎知識検定とし、2年次までにこれらの資格を取得することを3年次への進級要件とします。これらの資格を主体にして情報処理や医療への関心を高め、楽しみながら修学できるように、パソコンの組み立てや、ロボット制御など実習・演習科目を増加させます。その中でも患者シミュレータSimMANを用いた授業は、様々な病態の医学的理解とともに、ロボット制御という情報処理技術を体験しながら学ぶアクティブラーニングの中心的実践科目として位置づけています。

3年次以降は、電子カルテ等の医療情報システムを主体にした医療情報技師を中心にし、医療系企業を目指す基本情報技術者向けの履修科目と、医療機関で活躍する診療情報管理士向けの履修科目を配置します。特に基本情報技術者では、Web型電子カルテの開発を目標として医療系アプリケーションの開発を体験します。診療情報管理士では、診療プロセス論の演習を通じて医療行為と医療データのマッピングを理解させ、医療データ分析の基礎学力を向上させます。これから進化していく医療分野に対応できる知識と技術を確実に身に付けて卒業させるカリキュラムとしています。



医療情報学科の教育内容構成像

平成26年度夏期FD検討会報告

医療保健学部看護学科では開学以来、継続的にFD（faculty-development）活動を実施しており、FD研修会は夏と春の年2回開催されている。今回は9月3日に学科全教員参加のもと五反田キャンパス内で実施されたFD研修会の様子を紹介したい。

まず、3名の教員より8月に開催された私立大学連盟のFD推進ワークショップの報告が行われた。このワークショップは『高校生が大学1年生に成長するために』をテーマとし、高校と大学での学習を円滑に接続するとともに、大学教育に求められる質的な転換について検討しようというものであった。具体的な内容として、変化している高校教育の実際と大学入学を希望する生徒の現状、これを受け止めて行こうとするときの大学側の課題、さらに、大学個々もつ人材育成像につなげていくため大学が取り組んでいる入学前から入学後初期、ならびに卒業にいたるまでの幅広い活動等が紹介されたことが報告された。

次に、『新カリキュラムの実習科目において達成したい目標に関するワークショップ』を実施した。これは、本学科において平成27年度より改訂が予定されている新カリキュラムに関して、特に実習科目に注目して達成目標を検討するワークである。新カリキュラムでは、看護職に就きたいという学生の動機を維持し主体的な学習を継続できるよう、臨地での演習・実習を入学早期から4年後期まで展開することとしている。本学科独自の人材育成目標を到達するためには、この実習をひとつの軸とし講義・演習・実習の学修目標を一貫させ明確にする必要がある。このような考えに基づいて、ワー

クショップでは事前に領域ごとに検討した実習目標を持ち寄りすり合わせて、3年生後期からの各論実習開始までに獲得をめざしたい能力について、領域と職位とが混合となるよう構成した5つのグループでディスカッションを行った。その後、各グループから成果を発表し、科目を超えて学生と教員とが拠り所とできる学修目標をループリックとして整えていくこと、この目標にそって学生が自らを振り返り評価する意義と方法とを学べるようにしていくこと等が課題として提案された。

今回は2つの企画であったが、短期的長期的見通しを描くディスカッションが行われ、意義深い研修会であった。

医療保健学部 看護学科FD委員会 あべ ももこ 阿部 桃子



第10回「医愛祭」を終えて

今年で10年目の節目を迎えた「医愛祭」。私は、本学の教員になった4年前より、看護学科の学科企画担当として参加させていただいております。

4年前、それまでは教員が企画した内容のみで行われていた学科企画を、学生のアイデアで企画する内容も盛り込むことを導入しました。第7回の医愛祭では「妊婦体験」企画を催しました。第8回と第9回は、私が「体の仕組みと働き」を担当していることもあり、解剖生理学に纏わるクイズや展示を中心とした催しでした。実際の企画運営に当たったのは、自主的に関わってくれた有志の学生たちです。毎年、学生たちの企画力と行動力に支えられております。学科企画にご協力いただける学生は主に1年生になりますが、同じ1年生でも年度によって特徴が違うことを講義以外でも実感でき、私自身も楽しみながら関わらせていただいております。

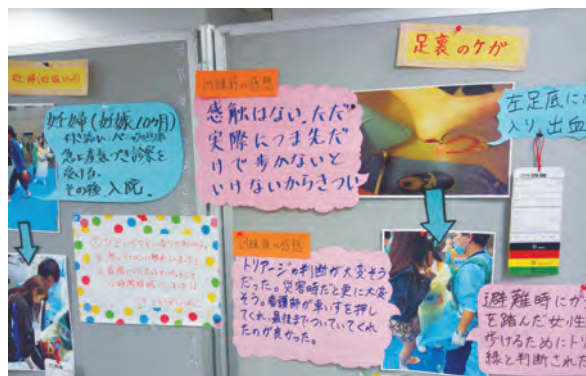
今年度の企画は、10月初頭にNTT東日本関東病院で行われましたトリアージ訓練の様態を発表するという内容でした。このトリアージ訓練には、看護学科1・2年生の希望者が、「傷病者」役や「傷病者の家族・付添人」役として参加しております。訓練の様子を写真撮影し、参加した学生にインタビューして、トリアージにおける看護師の役割という視点でまとめ、展示という形式で発表しました。1年生なりに、トリアージとは何かを調べ、それに基づいて訓練で取材し、展示物としてまとめ上げておりました。

今年度の企画は、トリアージ訓練中の写真撮影など取材をおしいただいたNTT東日本関東病院の御協力のおかげもあり、災害時医療の実際について学生の視点から垣間見ることができた内容でした。来場して下さった方々も、本番さながらの訓練の様子を写真などの展示物で観覧し、熱心に質問される方も多かったです。災害

医療をわかりやすく知っていただく内容としても、良かったのではないかと思います。

本学には救命救急を学ぶサークルがいくつか設立されており、医愛祭でも救命法を紹介する企画が増えてきた感があります。そのような企画とは一味違い、災害医療の実際を学生の視点で紹介するような企画が、看護を学び始めて間もない学生の柔軟な発想により生まれました。このような学生の発想力・行動力を目の当たりにしますと、私の発想力も動脈硬化よろしく硬化が進んでいることを気付かされます。毎年、入学してくる学生は同じ年齢ですが、私は確実に歳を重ねていきます。“発想”硬化が進行しないよう、心がけなければなりません。

医療保健学部 看護学科 たかの かいや 高野 海哉 講師



展示の一部。“手作り感”満点ですが、うまくまとめられていたと思います。

平成26年度 医療栄養学科卒業研究発表会

医療栄養学科では、昨年度は医愛祭にて卒業研究発表会を開催していましたが、今年度は11月17日に研究発表会が口頭で行われました。本学科の卒業研究は選択科目であり、意欲ある学生が、日頃熱心に研究に取り組んだ成果18演題について発表しました。参加者4年生42名、3年生47名 計89名で、活発な討論が行われ、充実した発表会となりました。卒業研究が学会発表につながったものもあり、高度な研究内容となっています。

卒業研究発表題目一覧

- **五百蔵良研究室**
『有用微生物の探索－花・果実からのパン用野生酵母の分離・同定と製パンへの応用－』
『有用微生物の探索－花・果実からの植物性乳酸菌の分離・同定と発酵乳への応用－』
- **碓井之雄研究室**
『プラセンタの効能について』
『アトピー性皮膚炎に対するn-3系多価不飽和脂肪酸のもたらす影響』
『妊娠成立に関わる免疫寛容機序の解明について』
- **大道公秀研究室**
『ぶどうジュース中のパツリン汚染調査』
- **北島幸枝研究室**
『24時間蓄尿の使用器具の比較と写真による摂取量の評価』
『写真を使用した食事摂取量の評価の検討』
- **西念幸江研究室**
『調味料添加によるマスキング効果の検討』
- **清水雅富研究室**
『多価不飽和脂肪酸の過酸化反応から生成されるアルデヒド類によるAmes試験』
『各種脂肪酸摂取量の違いによるマウス肝臓中のタンパク質およびミトコンドリアDNAへの影響』
- **下田妙子研究室**
『中高年の乳及び乳製品摂取頻度と睡眠との関連』
- **鈴木礼子研究室**
『未就学児の食環境・栄養摂取量の現状評価～秤量法調査』
『食・健康情報の認知度調査～食育ボランティア活動』
- **細田明美研究室**
『女子大学生の食事摂取状況と口腔内環境との関連』
- **三舟隆之研究室**
『鯛の楚割の復元』
- **森本修三研究室**
『大規模病院の給食（クックサーブ方式、温冷配膳車利用）における適温給食の実態を調査し、適温給食への更なる工夫を試みる』

（指導教員五十音順）

学会発表された卒業研究の紹介

- **第10回日本給食経営管理学会学術総会**
平成26年11月29～30日 京都・同志社女子大学今出川キャンパス
・『大規模病院における適温給食の現状報告』
野方美沙、藤江瑠麗（森本研究室）
- **第2回日本食育学会総会学術大会**
平成26年5月17、18日 神奈川・明治大学生田キャンパス
・『現代の東京都における伝統食についての横断的調査』
佐藤衣梨、土屋真理子
・『おやつについての認知度調査』
土屋真理子 佐藤衣梨（鈴木研究室）
- **第61回日本栄養改善学会**
平成26年8月12～14日 神奈川・パシフィコ横浜
・『未就学児のカルシウム摂取量の横断的調査～秤量法による評価』
太田有紀、池邊葵、松丸みずほ、山崎茜
・『未就学児の脂質摂取量の現状～秤量法による調査～』
池邊葵、太田有紀、松丸みずほ、山崎茜（鈴木研究室）
- **第73回公衆衛生学会総会**
平成26年11月5～7日 栃木・栃木県総合文化センター他
・『未就学児を対象とした秤量法による亜鉛摂取量の横断的調査～成長への影響』
山崎茜、松丸みずほ
・『未就学児のビタミンB₁摂取量の秤量法による横断的調査とインスタント食品使用状況について』
松丸みずほ、山崎茜（鈴木研究室）

（学生名と研究室名のみ記載）

学生献立 | 東京都福祉保健局HPに紹介

東京都の食生活改善の取組紹介のHP: 東京都食生活改善普及運動 平成26年度「野菜でおもてなし!～おいしい野菜料理をもう一品! 適量の野菜がならんだ食卓をつくらう～」 500kcal台野菜たっぷりバランスランチメニューの企画の一環として、本学3年生の作成献立『ヘルシーねばししゃき膳』が、東京都福祉保健局HP http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kensui/ei_syo/yasai/500kcal.html に紹介されています。この献立は、*都庁1階アートワーク台座でのメニューの写真展示（平成26年9月13日から同月19日まで）でも写真展示にて紹介されました。



教育・研究活動紹介（今泉ゼミ）

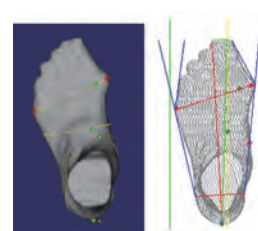
私のゼミ・研究室のテーマは「医療人間工学・バイオメカニクス」です。今年は3年生8人、4年生10人で頑張っています。生体計測やアプリ開発、データ分析などの手法から、医療保健分野の社会的・学術的課題を解決することを目標としています。

現在の私のメインの研究テーマは、足の機能構造の分析評価に関するものです。足は二足歩行を行う人間の移動を支える唯一のインターフェースであり、外反母趾などの足のトラブルは様々な機能の低下を引き起こします。そこで、足の形態や機能の測定を行い、足のトラブルのメカニズムの解明と評価方法の開発に取り組んでいます。

その他、医療現場に直結する研究も少しずつ積み重ねており、千葉県立東金病院の電子化パスの導入評価、看護師の腰痛とQOLの調査、近年はスマートフォンに注目し脱水症リスクのモニタリングや、口腔機能評価などアプリ開発も行っております。研究結果は学生の奨励賞受賞やメディア掲載など成果も出つつあります。

私の研究のモチベーションは、人間をより深く理解すること、そして、それに基づいて役立つシステムを開発することにあります。医療という不確実な状況で、人間の見える多様な姿はとても興味深いものです。今後は患者ロボットなど医療シミュレーション教育についても人間工学的観点からチャレンジするつもりです。

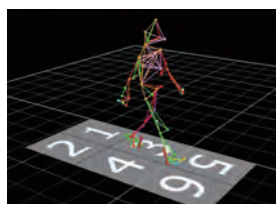
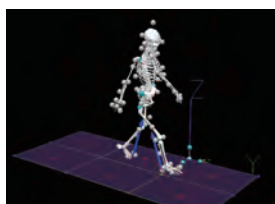
医療保健学部 医療情報学科 いまいづみ かずや 今泉 一哉 准教授



卒業研究紹介①

私は「靴のサイズと子どもの歩き方」に関する卒業研究を行っています。産業技術総合研究所に技術研修生として通いながら、10名の小学生のモーションキャプチャデータを取得して、今分析を進めているところです。子どもの足は1年間に1cmくらい伸びるので、靴選びは大変困ります。どのような基準で靴を選べばいいのか、安全なのかという観点から興味深い結果がえら得ることを期待しています。これまでに、大き目の靴を履くことで、歩き方が統計学的に有意に変化することがわかりましたので、さらに分析を進めていきたいと思っています。

医療保健学部 医療情報学科4年 秋元 麻樹



モーションキャプチャ

卒業研究紹介②

私は「スマートフォンを利用した脱水予防のためのアプリケーション」を開発しています。3年次のゼミから継続して取り組んでいます。

このテーマは、温度と湿度が測れるセンサとスマホを接続することで、利用者が居る環境での「熱中症指数」をリアルタイムに表示と警告を出すことができます。この研究の一部は、2014年に行われたITヘルスケア学会で発表し、奨励賞を受賞しました。その後、在宅診療への同行などを行って、高齢者の脱水リスクの調査なども行っています。

医療保健学部 医療情報学科4年 廣島 孝香



医療情報学科の教育に最新型患者シミュレータSimMan 3 Gを導入

医療情報学科の教育に最新型患者シミュレータSimMan 3 G（レルダールメディカル社製）が導入されました。これは、同学科大久保学科長を責任者として申請された、平成25年度私立大学等研究設備整備費等補助金が採択・交付されたことによるものです。

患者シミュレータは近年、医師、看護師などの医療職者のチームトレーニングや、医学生、看護学生などの卒前教育において注目されているものです。このシミュレータは、脈拍の触診、血圧測定、心電図測定、呼吸音の聴取など、様々な患者さんの生理学的変化を再現できるほか、それに対して行われた処置や投薬などが、自動的に記録できます。このような高機能なシミュレータを、医療情報教育へ導入する試みは、日本初の事例です。具体的な活用方法としては、1) 生理学や解剖学など身体の仕組みと働きについて、机上だけでなく実体験を持って学ぶこと、2) 模擬医療環境を構築して医

療職者や医療現場の様子を模擬体験すること、3) 患者シミュレータを操作するためのシナリオプログラムの作成や、関連機器の操作などのできるシミュレーションスペシャリストを養成することが挙げられます。この取り組みは本学の目指す現場に強い医療情報のスペシャリストの養成に大きく貢献すると期待されます。



院生の声



私が製薬企業の研究者と大学院生という二重生活を始めてから約1年が経ちました。私が開発している消毒薬が寄与する感染制御について理解を深めるとともに、業務を通して興味を抱いていた事柄について研究できる。これが本大学院への入学を決意した理由でした。研究に重

きを置きながらも講義を聴講したいという私の想いに対して、小林研究科長にご配慮いただき、博士課程の院生でありながら修士課程の講義を聴講させていただいており、ほぼ毎週、五反田キャンパスに通っています。当初は時間管理に苦労しましたが、前期を終えた頃には、随分慣れてきたように思います。

講義では初めて聞くことも多く、改めて感染制御の奥深さを感じるとともに、自分自身の不勉強さを痛感しています。また、講義の聴講を通じて修士課程の方とつながりができたことは嬉しい誤算でした。不定期の飲み会などでは、感染制御に従事する職種の方から、

異なる立場、視点からの様々な意見を聞くことができ、良い刺激となっています。このつながりは今後も大切にしていきたいと思います。博士論文の研究では消毒薬の殺菌活性の評価系の見直しを行っています。微生物を扱うテーマのため、実験の準備や実施、結果判定のスケジュール調整が難しいのですが、少しずつ進んできており、個人的には興味深い結果が得られています。大学院入学においては、家族の理解も大きな支えとなりました。講義聴講のため、家を空けることも多いのですが、その分、家にいるときは家族との時間を大切にするようにしています。特に娘（2歳）には、家に帰るといつも癒されています。

今後は学会参加などを通じてさらに知識の幅を広げるとともに、感染制御に寄与できるような研究を行えるよう努めていきたいと思っています。

医療保健学研究科 博士課程1年 感染制御学 植田 知文



私は、鹿児島県の医療系専門学校で看護教育に携わっています。毎週金曜日の夜に鹿児島から東京に向かい、週末は東京で大学院生として学ぶ生活にも慣れてきました。私が大学院への進学を決めたのは、「初心に戻って学びたい」という思いからです。社会では看護師の実践能力の低下が問題とされ、私が勤める専門学校での看護教育も課題が山積みとなっており、従来の考え方・方法では通用しないと強く感じていました。カリキュラムや教育方法などについて検討を重ねてきましたが、臨地実習で「思うような看護ができない」と落ち込む学生を前にして、私自身の無力さを感じていました。ある時、人材育成と人材活用をテーマにした研修を受け、マネジメントという観点から研究を行いたいと考え、進学を決意しました。

大学院では、人材育成や人材活用、研究手法、安全管理などについて学んでいます。先生方や院生同士でのディスカッションは、根拠や理論を踏まえつつ、自分の意見をどのように表現したら伝わるかということにも考慮しながら、広い視野で物事を考えることができ、とても楽しく有意義な学びとなっています。論文も文献をクリティーク（評価、検討）することから始まりましたが、まだまだ試行錯誤の状態で、日々奮闘しております。入学してからは、論文を読む時間・考える時間をいかに確保するかといった時間管理が大変で、仕事でも優先順位を考えながら集中して進めることが身につけてきました。

大学院では、人材育成や人材活用、研究手法、安全管理などにつ

いて学んでいます。先生方や院生同士でのディスカッションは、根拠や理論を踏まえつつ、自分の意見をどのように表現したら伝わるかということにも考慮しながら、広い視野で物事を考えることができ、とても楽しく有意義な学びとなっています。論文も文献をクリティーク（評価、検討）することから始まりましたが、まだまだ試行錯誤の状態で、日々奮闘しております。入学してからは、論文を読む時間・考える時間をいかに確保するかといった時間管理が大変で、仕事でも優先順位を考えながら集中して進めることが身につけてきました。

今後も先生方からご指導いただきながら、先輩方、同期の皆様との交流を深め、研究の基礎を学び、体力だけは自信がありますので、気力を高めつつ充実した院生生活を送りたいと思います。

医療保健学研究科 修士課程1年 看護マネジメント学
冷水 陽子



私は病院で助産師として勤務する中で、研究的視点を深め、助産師教育について学びたいと考え、大学院への進学を希望しました。

日々の業務の中で根拠や理論に基づいたケアを行えているのか、自己の援助を振り返り知識不足を感じることもありま

した。また、よりよいケアを行うためには、起きている現象を科学的にアセスメントする力や論理的な思考過程を身につける必要があると考え、研究の基礎をしっかりと学びたいと思いました。

臨床経験を重ねていくと後輩育成に携わる機会が多くなります。しかし、私は教育について学んだ経験がないため、臨床現場での実習指導や新人教育に対して、先輩に教わったように教えるしかなく、試行錯誤しながら学生や新人助産師と関わる自己の指導方法に疑問を感じていました。大学院で助産師教育について学ぶことで、後輩

育成の責任を果たすことができるのではないかと考えたことが進学を希望したきっかけとなっています。

仕事と大学院の生活を両立させることに困難を感じることもありますが、在職のまま大学院で学び、学んだことをすぐに実践に活かすことができるという手応えのある充実した日々を送ることができています。修了後は、助産師として臨床での研究や教育的な幅広い視点を持ち、リーダーシップをとること、助産師のやりがいや楽しさを伝えられる魅力ある職場づくりを目指していきたいと考えています。

熱心に指導してくださる大学院の先生方や先輩方、同期に刺激を受け、進学を後押ししてくれた職場の協力により学ぶことができることに感謝し、大学院での生活をより充実したものにしていきたいと思っています。

医療保健学研究科 修士課程1年 助産学 内田 寛子

学生・教職員が一丸となった国家試験対策への取り組み

東が丘・立川看護学部は平成22年4月に開設され、平成25年度末に第1期生を社会に送り出しました。平成25年度は「国家試験対策ワーキンググループ」として国家試験対策に取り組んで参りましたが、平成26年度からはさらに合格率を上げるために、各領域の代表者、事務職員からなる「国家試験対策委員会」を設置し、2年次生から国家試験対策に関する支援を強化しております。

今年度の国試の目標は、「看護師国家試験合格率100%」と設定しました。この目標達成のため、国試ガイダンスの実施、看護師国家試験および保健師国家試験の模擬試験の実施、教員による強化対策補講、講義形式のDVD視聴、グループ学習の支援などを計画的に実施しています。また、模擬試験の結果を教育効果や成果と捉え、個々の学生の学習支援、国試対策に反映させています。本学部における国試対策の特徴として①卒業研究ゼミを中心とした対応、②学生委員との連携があげられます。

① 卒業研究ゼミを中心とした対応

卒業研究ゼミは、領域ごとに実施され、1グループ学生9名の編成で卒業研究に取り組んでいます。4年次においては統合看護学実習、卒論などゼミ単位で活動することが多いため、模擬試験結果の振り返り、学習指導、相談など国家試験対策もゼミ単位で実施しています。ゼミでは一人ひとりの学生の状況がある程度把握できているため、細やかで適切なアドバイスが可能になり、各領域の教員全員で個別的で継続的な支援を行っています。

② 学生委員との連携

「国家試験対策は本来学生が主体となって取り組むべき」という考えから学生による学生委員が組織され、国家試験対策委員会と連携・調整しながら活動しています。今年度の4年次生は、ゼミ単位で1～4名の学生委員を自主的に選出し、18名のメンバーで情報

の共有を図っています。学生委員の活動によって学生間のニーズの把握や教員との連絡調整がスムーズで、様々な改善を図っています。4年生専用の教室の確保と使用の方法についての調整、学生の希望によって開設した業者による出張講座などがその例です。

以上のように、本学部では学生、教員が協力して国家試験対策に取り組んでいますが、これは何よりも本学部に入學してきた学生たちの「看護師、保健師として仕事をしたい」という夢を叶えるためのものです。

また、保護者の皆様の温かな見守りや励ましも夢を叶えるためには必要不可欠ですので、保健師国家試験（2月20日）、看護師国家試験（2月22日）の受験に向け、ご協力をお願いいたします。

東が丘・立川看護学部 看護学科 国家試験対策委員会
委員長 岩本 郁子
(臨床看護学コース総合看護学領域 准教授)



みんなで頑張ります！

平成26年度「看護学実習施設に対する説明会」を開催して

看護学実習は総合的な判断に基づく自律的な看護実践を展開するための基礎的能力を育む重要な科目であり、卒業要件単位数の約2割を占めています。また、看護学実習は臨地で行われ、実習施設および実習指導者、さらには患者様の看護教育に対する理解と支援なしには成立し得ない貴重な学習の機会でもあります。この貴重な学習である看護学実習が学生にとって効果的で有意義であるためには、大学教員と施設の実習担当者との連携が不可欠です。

本学は実習施設に恵まれ、国立病院機構の病院を含め、多くの病院で実習を受け入れて頂いております。そこで、看護部長をはじめとする実習担当者の方々と大学教員とが一堂に会し、相互理解を深める場として、平成25年度から「看護学実習施設に対する説明会」を企画・運営しています。平成26年度の「看護学実習施設に対する説明会」は12施設50名の実習担当者と教員46名が参加して、本学部の教育への取り組みに関する説明、実習指導に関する意見交換が行われました。意見交換では、本学部が学生支援の一環として取り組んでいるコンタクトグループについての質問があり、実習指導を担当する方々が学生の生活や学内での学習の様子について関心をもたれていることがわかりました。また、実習担当者の方々からは、教員と相談・検討しながら個々の学生に応じた実習指導を進めていることが紹介され、実習担当者と教員がよりよい実習指導を目指し、協働して取り組んでいることが実感できました。

本学部が平成24年度から取り組んでいる「看護学実習連携会議」についてもご紹介させていただきます。「看護学実習連携会議」は、

国立病院機構東京医療センターの看護師長、実習指導者と教員が参加し、実習指導について語り、検討する場です。平成24年度、25年度は実習指導に関する課題を共有すると共にカンファレンスの指導について検討しました。今年度は、実習指導者と教員が連携して看護学実習に取り組む体制の構築に向け、検討を重ねているところです。

今後も「看護学実習連携会議」や「看護学実習施設に対する説明会」といった会合を定期的かつ継続的に行うことで、教育の進め方に関する共通認識をより一層深め、学習環境の充実に向け努力したいと思います。

東が丘・立川看護学部 看護学科 実習検討委員会
委員長 穴沢 小百合
(臨床看護学コース基礎看護学領域 准教授)



新保健師助産師看護師法により看護師の業務・役割拡大が実現

看護職（看護師、保健師、助産師）の業務や身分等は、昭和23年に制定された「保健師助産師看護師法」（以下、保助看法）で決められております。この法律では、看護師の業務は、「傷病者若しくはじょく婦に対する療養上の世話又は診療の補助をおこなうこと」とされており、「診療の補助」に関しては、「主治の医師又は歯科医師の指示」の下で行うことと規定されています。

昭和23年当時と今の社会状況とを比較しますと、少子・超高齢社会（現在、65歳以上が人口に占める割合は24%）を迎え、がん、脳卒中、心疾患を中心とした生活習慣病が疾病の60%以上を占めており、医療に係る専門職種の種類や数も大幅に増え、医療従事者の教育も高等化（大学教育）し、医療保健福祉を取り巻く環境は大きく変化しております。

多様なニーズをもつ患者さんや国民のみなさんに対して効果的・効率的でタイムリーな医療を提供していくためには、医療職種間で新たな業務・役割分担をし、チームとしての医療提供体制が必要なことは誰の目にも明らかな状況です。

このように医療環境は大きく変化し、チーム医療の必要性がいわれ続けているに拘わらず、昭和23年以来、一度も手が付けられてこなかった看護師の業務・役割拡大が、今国会（平成26年通常国会）での保助看法の改正（新保助看法）という形でようやく実現しました。看護師としての十分な経験を備えた看護師が、厚労省が指定する研修を受けることにより、診療の補助行為の中で、実践的な理解

力、思考力及び判断力並びに高度かつ専門的な知識および技術が特に必要とされる行為（「特定行為」とよばれます）を手順書にしたがって、実施できるようになりました。この新保助看法により、今後、ますます先進化・高度化する医療、超高齢社会を支える医療の一端を担う看護師にとっては、大きな改革の一步を踏み出しました。

平成22年の開設当初から、大学院修士課程において特定行為も実践しながら患者さんたちのQOLの向上に貢献できる「診療看護師（JNP）」を育ててきた本学看護学専攻では、この法律の一日も早い制定を待っておりました。待ちに待ってようやく改正された保助看法が、患者さんや国民のみなさまに「よかった」と評価していただくようにするためには、既に活動している、またこれから巣立っていく「診療看護師」の活動を、大学としてしっかり支えていくことだと思っております。さらに、医師主導で進められてきたパターンリズムの医療の中で、国民のみなさまが「診療看護師」に対して理解を持っていただくことも極めて重要であると思っておりますので、よろしくご支援の程お願いします。

一人でも多くの在校生、卒業生の皆さんが、看護師としての経験を積んだ暁には、「診療看護師」を目指したいと思うような姿にしていきたいと考えています。

副学長 大学院看護学研究科長 草間 朋子

大学院修了後の私の助産師活動

大学院では主に正常経過をたどられている妊産婦さんに関わり、妊娠・出産に伴う心身の変化やわが子を産み、親になっていく過程を学びました。沢山の妊産婦さんとの出会い、お産に立ち会う中で、大学院修了後は助産師として、お産に携わっていききたいという気持ちを強く持っていました。しかし、4月からの配属先はNICU 9床、GCU26床からなるNICU病棟でした。私自身も戸惑う中で勤務が始まり、当初は密閉された空間で慣れない機器やモニター音、また、大切な命をお預かりすることに緊張の連続でした。しかし、新生児科の医師や看護師長をはじめとする多くの先輩、同僚、また赤ちゃん、お母様方に支えられ、6カ月が過ぎた今、この環境で助産師が働くことの意味が少しずつ見えるようになってきました。

母になる女性にとって、妊娠、出産を経て、新しい命を迎えることには多くの喜びがあります。しかし、それと同時に妊娠、出産には必ずリスクが伴います。それは、母体へのリスクだけでなく、生まれてくる赤ちゃんもまた同じです。NICU・GCU病棟には早産の赤ちゃんや先天性奇形、合併症をもつ赤ちゃんたちが入院しています。突然出産に至ったお母さんや出産後にわが子の障がい、合併症を知ったご両親、様々な思いを抱えているご家族がいます。妊娠中に思い描いていた育児ではなく、治療が優先される環境の中で、私

が感じたように慣れないモニター音や機器、環境に戸惑い、ご不安も多く抱えておられます。そんなご家族の姿を間近にみていて、NICUに配属されなければ分らなかったこと、見えなかったことに気づかされました。

助産師として、自律して正常な妊娠、分娩経過が判断出来る能力、育児支援が出来る能力は必要不可欠です。しかし、早産になってしまった場合やお子さんに奇形や障がいがあった場合、その先をきちんと知り伝えられること、また、生まれてきた命を守り、ご家族を支えるための判断・支援能力も助産師には求められていると強く感じています。色々な形で産まれてくる小さなかけがえのない命、そしてその命を守る役割を担う母親、さらに、そのご家族の心に優しく寄り添える助産師を目指し、これからも日々邁進していきたいと思っています。

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育病院
助産師 阪部 志穂

（2014年3月 東京医療保健大学大学院、
看護学研究科高度実践助産コース修了）

学生支援センターより

就職支援

就職支援は、本学「学生支援に関する基本方針」の一つである「学生に対する進路支援」に基づき学生が主体的に進路選択や職業選択を行うことができるよう、個別面談・就職支援ガイダンス等を充実するなど、学生が必要とする進路支援を行うことを目標としております。

平成26年度の就職支援につきましては、就職活動のスケジュールが変更されたことを視野に入れての対応を行っております。

広報の解禁については、従来の12月が4年次生になる前の3月に後ろ倒しになり、また、選考活動については、4月から8月に変更となりました。

医療栄養学科、医療情報学科については3年次生の4月に進路・就職総合ガイダンスⅠを実施し、「平成26年度就職活動ノート」を配布の上、就職活動に向けての心構えなどを含めて、情報発信を行いました。就職活動ノートは全キャンパスの3年次生全員に配布しました。

具体的な就職支援講座は、「就職活動概論講座」「自己分析講座」「自己PR文書作成講座」「エントリーシート書き方講座」「面接の受け方講座」「グループディスカッション講座」など実践に即した内容で実施しました。

筆記試験対策につきましては、「SPI対策講座」として従来の倍の16回実施しました。

また、業界・業種・職種について、学生が幅広い知識と情報を得ることができるように、様々な企業・病院による「企業研究キャリア講座」を実施しました。

学生個々に対しては、グループ面談、個人面談を実施して、きめ細かい支援を行っております。

さらに、本学の卒業生から実際の仕事の内容などを聞く機会を設け、3年次生が仕事のイメージを具体的に把握できるようにしております。同様に4年次生の内定者から、就職活動への取組みの経験を話してもらい、就活本番への意識づけを図ることとしました。

看護学科においては、担当教員から、病院選択の視点、応募についての面談を実施しております。支援講座については病院の選考対策として、「小論文対策講座」、「面接の受け方講座」「社会人マナー講座」などを実施し、実践に即した対策を行っております。

また、実習病院、一般病院からの「病院説明会」を実施し、各病院の状況をしっかり把握できる機会を設けて就職活動の準備を行っております。

東が丘・立川看護学部においても、同様の支援講座を実施し、国立病院機構関東信越ブロック看護学生フォーラムへの参加、また国立病院機構などの病院説明会、卒業生からの説明会などを実施し、就職活動に直結した情報の収集ができるようにきめ細かい対応を行っております。



就職活動ノート表紙



企業研究キャリア講座の模様
(医療栄養学科 3年次生)

第10回医愛祭が開催されました

平成26年11月1日(土)、2日(日)に世田谷キャンパスにて第10回医愛祭が開催されました。大学祭も第10回と区切りの開催となり、今までで一番華やかな大学祭にと願いを込めて今回のテーマは『華』になりました。

初日の天候は雨模様となり客足が心配されましたが2日目は天候も回復し来場数も昨年を上回る人数となり大変盛り上がりしました。



『第10回医愛祭』ポスター
今年のテーマは『華』

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会連携協定を締結

東京医療保健大学は、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向け、それぞれの資源を活用してオリンピック教育の推進や大会機運の醸成等の取り組みを進めるため、一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との協定を締結しました。連携大学は10月1日付で195校が加わり、761校となりました。



東京医療保健大学メディテーションセンターを開設しました

東京スカイツリーで賑わう江戸情緒あふれる蔵前（東京都浅草橋3丁目）に本格的な座禅ができる施設を備えたメディテーションセンターを設置しました。瞑想を行うことで、姿勢を整え、静かな環境で集中することにより、呼吸が整い、精神的にもリラックスできます。また、瞑想と学問の関係は科学的にも研究されており、その効果も検証されています。卒業生並びに保護者や関係者の方の利用も可能です。施設の利用にあたっては、学生支援センターまでお問い合わせください。

国際交流

International fellowship

本学では夏から秋にかけて活発な国際交流が展開されました。

特に11月には国際交流委員会が主催する以下の2つのイベントがありました。

11月7日、本学学生が海外研修で訪問するハワイ大学看護・歯科衛生学部看護学科准教授モーリーン・シャノン氏をお招きし、国立病院機構キャンパスにて、「アメリカの自律した看護師はどのように育つか」というテーマで講演会を実施しました。アメリカの看護師教育標準、それぞれのレベルで要求される能力、アメリカで現在進められている医療改革制度オバマケアの下で、求められる高度実践看護師の役割などについてお話しいただきました。学部生、大学院生、教員、および外部からの参加者を含め73名が参加しました。講演後、東が丘・立川看護学部主催の交流会が開催され、自由な対話や学部生による剣舞、居合道の披露等、和やかで充実した会となりました。

11月11日～13日、同じく海外研修で本学看護学生が訪問する、シャミナーデ大学看護学部長パトリシア・キラディス氏が来学されました。今後、本学と同校との交流関係をさらに深める方法について話し合い模索することが来学の目的でした。NTT東日本関東病院と国立病院機構災害医療センターおよび日本看護協会を訪問し、日本の医療・看護についての理解を深めると同時に、本学看護学科の教員との対話、情報交換を通じ、今後さらに交流を深めていくことを確認しました。医療保健学部看護学科長坂本先生、東が丘・立川看護学部研究科長草間先生、同看護学部長山西先生との懇談会をはじめ、医療保健学部看護学科訪問では、授業参観、教員との情報交流会、学生との交流会などで活発な意見交換や対話がなされました。また、東が丘・立川看護学部訪問時には、山西看護学部長から同学部の教育方針やカリキュラムについての説明がなされ、学内施設見学、実習見学、および学生との交流（学生による茶道のお点前披露）などが行われ、とても友好的で実り多い時間となりました。



キラディス看護学部長にお茶のお点前を披露する学生

こうした体験を通じて、双方が理解を深め、今後さらに関係を深めていく方法を具体的に模索することとなり、双方にとって非常に有意義な体験となりました。

このほか、東が丘・立川看護学部では、8月と10月にアメリカから講師を招き、講演会を開催しています。8月は災害・救急看護の専門家ベギー・マクマホン氏から、アメリカの救急看護・医療をテーマに、10月はスタンフォード大学生理学看護学科のチャン・ギャレット氏から、オバマケア医療改革がNPの業務・役割に与えた影響についてご講演いただきました。

国際交流アドバイザー はやの まさこ 早野 真佐子



懇談する木村学長とキラディス看護学部長

アメリカにおける救急看護の現状と将来についての感想

救急災害医療に興味があり、参加しました。今回の講演では、アメリカにおける救急医療体制について、高次のTrauma Centerでは採算が取れないことに関連して閉鎖する施設が増えていることや日本でも導入が進んでいる“北米型ERシステム”の問題点等を知ることができ、とても興味深い内容でした。

また、特に興味があった救急外来（Emergency Department：ED）へ配属された新卒看護師に対する教育プログラムについて、その具体的な内容を講師の先生に質問しました。日本では、救急外来へ新卒看護師が配置されることは少ないと聞いていますが、アメリカでは、新卒看護師もEDへ配属され、その教育プログラム

のガイドラインはアメリカ救急看護師協会（Emergency Nurses Association：ENA）が作成し、このガイドラインに基づいて、各施設は、高性能シミュレーターを使用したスキルトレーニングを行い、臨床での実践と講義をミックスさせたとても実践的な内容となっているそうです。

このような話を聞き、アメリカを含む海外で働くことに対する興味が強まりました。今後もこのような講演会へ参加する機会があれば、是非参加したいと思います。

医療保健学部 看護学科 2年 斎藤 岳尋

(単位: 百万円)

平成25年度
学校法人 青葉学園
決算について
(経理財務部)

	法人		東京医療保健大学		青葉学園幼稚園		野沢こども園		合計	
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算
帰属収入	32.0	35.7	3,249.6	3,267.2	204.5	216.5	212.2	228.9	3,698.3	3,748.3
消費支出	61.6	58.9	3,135.0	3,202.4	164.1	159.8	192.7	200.7	3,553.4	3,621.8
帰属収支差額	▲ 29.6	▲ 23.2	114.6	64.8	40.4	56.7	19.5	28.2	144.9	126.5
減価償却①	0.0	0.2	313.7	311.1	8.3	8.1	5.5	5.3	327.5	324.7
退職金引当金繰入②	0.0	0.0	0.0	53.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	53.7
資産処分差額③	0.0	0.0	0.0	4.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.7
除く①②③収支差額	▲ 29.6	▲ 23.0	428.3	434.3	48.7	64.8	25.0	33.5	472.4	509.6

トピックス
Topics

東日本大震災 被災地支援活動

医療保健学部看護学科渡會睦子准教授が代表者である「住民とともに活動する保健師の会」が、このたび「東日本大震災における被災者の支援活動等に対する厚生労働大臣感謝状」を授与されました。渡會准教授は被災地における相談・カウンセリング、講演等の保健師活動を継続しており、住民・専門職からの信頼も厚いことから、今後一層の活躍が期待されます。

この他、実習や学生の自主的なサークル活動などを定期的に行っており、住民の方々と共に復興の一助となるような活動を継続しています。

地域支援活動

- 公開講座を下記の通り実施しました。
 - ・ 6月7日(土)「アンチエイジング(シニアもヤングも今日から実践)」(品川区)
 - ・ 10月19日(日)「認知症の人と共に生きる社会を目指してー認知症の予防から介護、地域での支え合いまで、今、私たちにできることはー」(世田谷区)
 - ・ 11月8日(土)「最期まで自分らしく生きるために」(品川区)
- 医療保健学部医療情報学科今泉一哉准教授が、世田谷区民の健康づくりを考える世田谷区健康体操連盟の顧問に就任致しました。
- 医療保健学部医療情報学科山下和彦教授が、5月19日付で埼玉県志木市の健康推進事業である「いろは健康21プラン推進事業実行委員会」の委員長に就任致しました。

学生・卒業生支援活動

- 学生への朝食営業を開始しました。
現在、全キャンパスで各1日限定30食を100円で提供しており、学生に大変好評です。

編集 後記
Editor's note

「超高齢社会」の中、2025年は団塊の世代が後期高齢者になり、国民の4人に1人が75歳以上の後期高齢者となります。2025年を見据えて厚生労働省は2014年11月に地域医療介護総合確保基金の交付を決定し、その活用を各都道府県に委ねました。そうした資金を受けて、医療介護連携をはじめとした事業が大きく動き出すとしています。これに伴い地域社会に向けて本学ができることや卒業生の活躍の場もますます広がることでしょう。特に医療政

学会・イベント等

- 「看護の日」イベントに参加しました。
医療保健学部看護学科の坂本学科長が会長を務める公益社団法人日本看護協会の「看護の日」のイベントに両看護学科の学生がボランティアとして参加しました。表彰式に登壇したり、「看護の日」PR大使の蛸原英里さんと共にトークショーに出演した模様は5月12日(月)の朝日新聞朝刊に掲載されました。
- 東が丘・立川看護学部学生が「消防操作大会」で活躍
平成26年12月現在、目黒消防団に90名の学生が入団して、地域の安全を守るため定期的な訓練を行っています。6月29日に行われた「消防操大会」では12名の学生が参加し、大規模災害発生時を想定した救護及び消火の演技をしました。
- 医療保健学部医療栄養学科大館順子准教授が公益社団法人神奈川県栄養士会会長表彰の「優良栄養士」として表彰されました。
- THCU学生ボランティア食育グループの活動
6月14日に行われました第21回日本がん予防学会総会で学生が発表しました。
演題名
「乳がん予防情報普及のための食育活動と認知度調査」
- 医療保健学部医療栄養学科学生のがん予防活動
6月21日に長野県で開催された第9回食育推進全国大会にブース出展しました。当日は25名の学生が、がん予防活動に参加しました。
- ITヘルスケア学会で学生が発表しました
医療情報学科4年生の向井歩美さんが5月25日に「ITヘルスケア学会第8回年次学術大会」において発表を行いました。同発表内容は医療関係者向けの医学専門誌「Medical Tribune」で紹介されました。
演題名
「スマートフォンによる口腔機能評価アプリケーションの開発」
- 大学院 大学院公開講座を実施しました。
7月5日「感染制御のこれから」と題し、小林研究科長並びに大久保副学長が講演を行い本学教員大学院生並びに修了生や関係者が多数発表を行いました。この他、平成26年度感染制御学企業人支援実践講座を実施しました。

- ホームページに卒業生のページを開設しました。
卒業生のページには「住所変更」「改姓」の届け出ができるようになりました。この他、卒業生向けの情報を発信してまいります。また、学生支援センターでは卒業生のキャリアプランを応援する卒業生相談窓口を設置しました。

策の中で医療情報の開発並びに共有と運営は最も重要視されており、本学の卒業生が中心となって関与しているものも増えてまいりました。日本の高齢化の波は早く、続いてアジア各地で同様の状況が想定されます。我が国の医療政策が世界に向けて発信される日に向けて、医療系大学として人材育成をもって社会に貢献していきたいと考えています。